

マヤ文明とヒスイ

竹田 英夫 (鉱床部)
Hideo TAKEDA

まえがき

メキシコのユカタン半島からグアテマラ、ホンデュラスにかけてマヤの美しい遺跡が多数分布することはすでに御承知のことと思いますが これらの遺跡はほんの氷山の一角に過ぎず まだまだ沢山の遺跡が草深いジャングルの中に眠っているといわれています。また 発掘されたものでもその範囲が一部に止まっており これらの全容が明らかになるには多くの人手と長い時間が必要とされることでしょう。

カリブ海に囲まれたユカタン半島の台地は焼けつく様に照りつける太陽をさえぎる密林に覆われ 薄暗い木立の切れ間から神秘的なマヤのピラミッドが青空の中にそそり立つ光景は今でもありありと脳裏に焼きついています。芸術の香り高い彫刻をあしらったマヤ文明の壮大華麗な遺跡は インカやアステカの文明に較べて数段優れているのではないかという印象さえ受けました。

マヤ文明がどこからどの様にして芽生えて来たのかという詳しい由来は今でも明らかではないようですが キリストの降誕以前から高度の文明を築き上げていたことは疑う余地がありません。驚くべきことには 紀元前に肉眼で行った天体観測から太陽や月の運行を正確に計算して1年を365日とした太陽暦を作り上げ 算数は20進法を用いていた上にさらにゼロの概念を導入していました。また インカ文明では文字が無くて 縄結び(キープ)を用いて連絡していましたが マヤでは神聖文字が使用されていたことも文明の尺度を知る手がかりとして差支えないかと思えます。

この様な高度のマヤ文明は大西洋に沈んだアトランティス大陸からもたらされたという意見や 後で述べる有名なパレンケ(Palenque)の遺跡の壁像が宇宙人との交流を暗示しており 宇宙人の影響を受けたとするETなみの見解もあり 神秘に対する果しないロマンの夢をかき立ててくれます。

民族の大移動

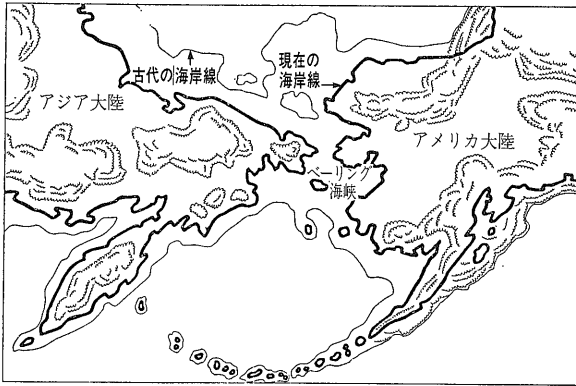
1492年コロンブスがアメリカ大陸を発見しましたが この発見の端緒は日本の存在が重要な役割を果たしたとい

うことです。それはマルコポーロの東方見聞録の中で「支那大陸の東に“ジパング”という金を豊富に産する島国がある」と記されており この“ジパング”——日本——に到着することを目指して船出することになったと聞いております。当時は海の果てが巨大な滝となっており 底知れぬふちに流れこんでいるという伝説があったそうで 新しい未知の航海を試みるには大変な勇気と苦勞が必要であったことは想像に難くないと思います。そして 新大陸に到着したとき コロンブスはそこをインドの一地方と信じこみ 西印度諸島と名付けた上に先住民をインド人としてインディオ(Indio)と呼びました。最近ではコロンブス以前に例のバイキングの一味が大西洋を渡ってアメリカ大陸に到着していた形跡があるといわれていますが 史実としての記録は残されていない様です。

さて 話は横道にそれましたが これらのインディオと呼ばれた先住民はどこからやって来たのでしょうか? 現在中米および南米に住んでいる多くの人達はメクティゾ(Mextizo)と呼ばれる先住民とスペイン人の混血に属していますが これらの人達が幼い時には蒙古人種と呼ばれる青いあざがお尻にあり このあざから彼等も東洋系の血をひいていることが明らかとされています。これは先住民が東洋人に属していることを立証するものでありますが 彼等の祖先はどのような経路をたどってアメリカ大陸に住みついたのでしょうか?

これまでのところでは彼等の祖先はアジア大陸からアメリカ大陸に移動したと考えられており 渡った経路は北のベーリング海峡付近であろうと推定されています。また この民族の大移動が開始されたのは今から約2万年前といわれていますが 当時このベーリング海峡を容易に渡ることが出来たのでしょうか?

この海峡は現在市80キロメートル 平均水深50メートルですが 2万年前の氷河時代には海水面が今より100メートル以上も低かったため ベーリング海峡は完全に干上がってしまいました。従って アジア大陸とアメリカ大陸は地続きとなり マンモスやバイソンなどの獲物を追う狩人達がつぎつぎに徒歩でアメリカ大陸に移動して行ったと推定されています(第1図)。そして 北米大陸からさらに南下してパナマ地峡を渡り 南米大陸



第1図 氷河期(古代)のベーリング海峡の海岸線と現在の海岸線

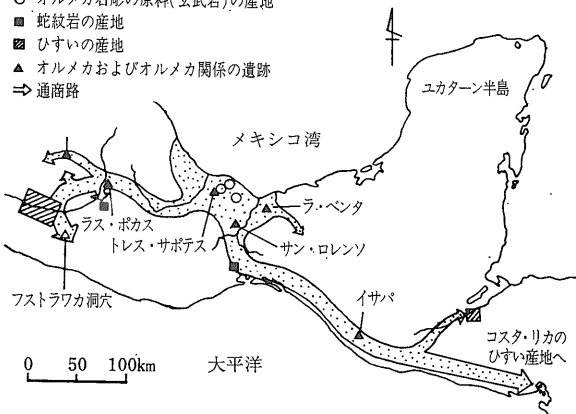
に移動して南米の最南端のマゼラン海峡に到着したのは紀元前9,000年頃であることが彼等の残したキャンプのたきびの跡から知られています。それにしても当時の状況からみて種種の困難を克服し数千キロメートルにわたり徒歩または丸木船などで移動して行った先住民のバイタリティーには驚くほかありません。

この様な狩猟中心の生活も氷河期に続く間氷期の気候の変化や乱獲による動物の減少等から食生活に危機が生じたため紀元前3,000~4,000年頃には一定の場所に住みついて農耕を中心とする生活に転換し始めたといわれています。この狩猟から農耕に転換したことを契機として文明が生まれ育つようになった点で人類史上最大の生活革命の一つをここに迎えたといってもいい過ぎではないと思われます。

マヤ文明

農耕生活で定着が始まると 農地に適した地域に集つ

- オルメカ石彫の原料(玄武岩)の産地
- 蛇紋岩の産地
- ひすいの産地
- ▲ オルメカおよびオルメカ関係の遺跡
- ⇒ 通商路



第2図 オルメカ文化の影響と通商路

て生活共同体を作り さらに人口が集中して村から都市に発展するようになりますが メキシコではメキシコ湾に面したベラクルス (Veracruz) 州のラ・ベンタ (La Venta) にオルメカ (Olmeca) 族が最初の都市を建設しました。

この時期は紀元前800~400年の形成期中期と推定されており 当時オルメカ族がすでにかなり高度の文明を築いていた様で 農業だけでなく通商や宗教の面でも進歩を見せ 都市国家としての社会制度を維持していた形跡が残されています。このオルメカ族は当時35万人位は居たであろうと推定されていますが 不思議なことに彼等の人骨は未だに一体も発見されていないということです (第2図)。

しかし メキシコではその後メキシコ中央部のテオティワカン (Teotihuacan) オアハカ (Oaxaca) 州のモンテ・アルバン (Monte Albán) 等でマヤ文明と肩を並べる高度の文明が発達しましたが これらのいずれもオルメカ文明を基礎として発展した形跡が認められます。とくに マヤ文明の中でも優れた算数や暦の知識および神聖文字も 起源をたどればオルメカ族から受けついでるので これらをさらに発展させたものようです。その証拠としては グアテマラのマヤ早期のペテン (Petén) の遺跡の彫刻がラ・ベンタのものに非常に良く似ていることがあげられており オルメカとマヤの両文明には余り大きな時間的間隙は無かったと推定されています。

さて マヤ族のテリトリーはメキシコのユカタン半島を中心として 石油の宝庫として知られているチアパス (Chiapas) 州とタバスコ (Tabasco) 州 グアテマラ全土さらにホンデュラスのウルア (Ulua) 河のところまで広がっていましたが 面白いことには彼等はついに統一的なマヤ帝国を作りませんでした。メキシコ中央部ではアステカ王国 南米ではインカ帝国という様に統一国家が実現しましたが マヤ地域ではそれぞれ都市国家の形成に止まり 後にこれらが連合してマヤパン同盟を作った程度に過ぎなかった様です。後で述べますが チチェン・イツァ (Chichén Itza) を築いたクルカン王もトゥーラ (Tula) 帝国から脱出して来たといわれており マヤの地に何故第2のトゥーラ帝国を作らなかったのかと不思議に思われます。

そのような問題は考古学者にまかせるとして マヤ全域を便宜的に南部・中部・北部に区分し それぞれの特徴をとり上げることにしましょう (第3図)。まず高地マヤとも呼ばれる南部地域はメキシコ中央部の勢力下におかれたため マヤ固有の文明は失われてしまい マヤとメキシコ中央部との文明の入りまじったものが生まれました。

一方中部地域と北部地域は低地マヤとされていますが

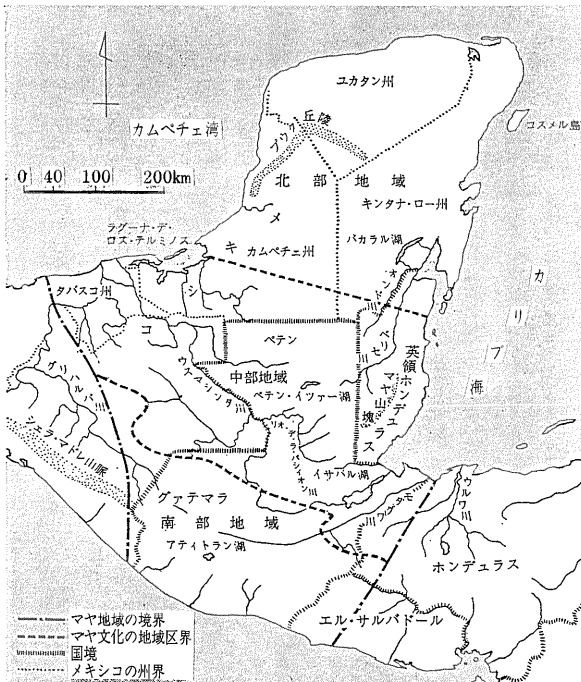
このうち中部地域は典型的なマヤ固有の文明が保たれて外来文明の影響は受けておりません。しかし どういう原因か分かりませんが 10世紀の初め頃からこの地域の住民は住みなれた都市から離れて行ったため 都市は荒れはててジャングルの中に埋れてしまいました。その様な中でも 壁画で有名なボナムパク (Bonampak) の遺跡では 一部の住民がごく最近まで先祖伝来のまつりを絶さず 過去の伝統を守り続けていたことがこの遺跡を発見する手引きになった例もあります。

また 北部地域は中部地域に共通した文化が発達しましたが その反面南部地域と同じくメキシコ中央部の外来文化の影響を受けて独自の文化が築かれた様です。面白いことにはこの地域では住民が逃げ出すこともなく 現在でも多くの子孫が先祖伝来の土地に住みついています(第1表 第4図)。

次にマヤ文明を代表する遺跡を紹介したいと思います が 紙数の都合上マヤ固有の文明を保つパレンケとマヤとメキシコ中央部の文明がまざり合ったチチェン・イツツアを取り上げることにしましょう。

パレンケの遺跡

メキシコの南東端のチアパス (Chiapas) 州とグアテマラとの境を流れるウスマシンタ (Uxmazinta) 河に沿って



第3図 マヤ領域と各文化地域(学生出版社編マヤより)

第1表 マヤ文明の年代区分

年代	時 期	南部 地域		中部地域	北部地域
		太平洋岸	高 地		
1530	後古典期後期		ミシュコ・ビエホ	↑ タヤサル	↑ 独立国家 マヤパン
	後古典期前期	トヒール鉛土器	アヤムブク	(放棄)	↑ トルテカ=マヤ
900	古典期後期		アマトレ=パンプローナ	↑ テベウ	↑ アブク, チュエネス
	古典期前期	↑ コツマルワバ	↑ エスベランサ	↑ ツァコル	↑ 地域文化 アカンセー
300	原古典期		↑ アウロラ サンタ・クララ	↑ マツァネル	
	150 A.D. 300 B.C.	形成期後期	エル・パウル クルセーロ	↑ ミラフローレス	↑ チカネル
800	形成期中期	↑ コンチャス	↑ ラス・チャルカス	↑ マモム シエー	↑ 形成期中期 マニー・セノテ
	形成期前期	↑ クワドロス オコス	↑ アレバロ		
1500	(古 期)				

パレンケ ピエドラス・ネグラス (Piedras Negras) ボナムパク等の遺跡が分布していますが この中 規模は少し劣るとしても建築物や彫刻が最も優れており ひすいとも縁の深いパレンケの遺跡を紹介しましょう。

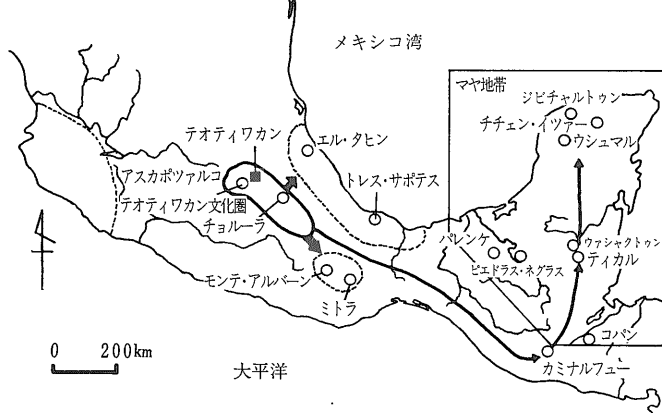
パレンケの遺跡はタバスコ州とチアパス州の境界付近にあり 平野部から丘陵部に移り変わる付近に建てられています。この遺跡は15平方キロメートル以上の面積を占めていますが まだ中心部の発掘に止まり 他の多くは密林の中に眠っているといわれています。その中央には長さ100メートル 巾80メートルの宮殿があり 擬似アーチ型の天井をもつ部屋と回廊が中庭を取り巻いており 一部の壁のしっくいには見事な彫刻が残されていますが その多くは盗人によりはがし取られたとのことでした。この宮殿の一角にはユニークな4階建の塔が建てられており 天体の観測と物見のやぐらを兼ねて利用されていたといわれています。

また “太陽の神殿” および “十字架の神殿” がありますが これらは紀元642年に完成しており “葉の十字架の神殿” と “碑銘の神殿” は紀元692年に作られたことがマヤ暦の年代が刻みこまれていることから判明しています。これらの神殿の正面の壁に美しい人間像の浮彫りと その周囲に神聖文字が刻まれており 神秘的な芸術の香りが漂ってくるようです。

一大センセーションをまき起したのは “碑銘の神殿” で 高さ20メートルに達する階段状ピラミッドの地下から 1952年6月メキシコの考古学者 アルベルト・ルース (Alberto Luz) により大納骨堂が発見されました。こ

古典期のメソアメリカ

→古典期におけるテオティワカン文化の影響



第4図 古典期のメキシコ中央部テオティワカン文化の影響

これは従来マヤのピラミッドは祭事と天文観測には用いられていたけれども エジプトのピラミッドの様に王様の墓場として建設されたものではないというそれまでの定説をうち破った貴重な発見となりました。

嚴重に埋め立てられた地下道を掘り進んで やっと到達した納骨堂には巨大な石棺が置かれており その上にのせられた分厚い石板には見事な彫刻がほどこされていました。石棺の中には壮年の男子の遺体が安置されていましたが 恐らくこの人物は7世紀後半から8世紀にかけてパレンケの支配者であったと推定され 納骨堂の外側には殉死者達を従えていたということで この納骨堂はすでに生前に完成していた模様です。

面白いことに遺体の周囲には沢山のヒスイが置かれており ヒスイの首かざりと指輪 さらに両方の手の平の中にもヒスイが握らされており ヒスイをモザイク状にはりつけて作った仮面を顔の上に乗せていた上に 死者の口中にもヒスイをふくませていました。この死者の

口中にヒスイをふくませる風習は中国にもあったそうで 天国に行くためのまじないと考えられていたようですが パレンケと中国では直接の関係は無く たまたま偶然の一致とみるべきでしょう。また パレンケにはヒスイを加工する人達が居た様子で 他の遺跡から発見されたヒスイもその細工の様式からパレンケで加工されたと推定されるものがあります。

チチェン・イツァの遺跡

ユカタン半島の中のユカタン州の東部に有名なチチェン・イツァの遺跡がありますが 一般的な観光コースとしては州都のメリダ (Merida) から国道180号線を約160キロメートル行けばチチェンの遺跡に到着し さらに東に走ってイスラ・ムヘーレス (Isla Mujeres) まで行きカリブ海の景色を満喫するという様になっています。

チチェン・イツァの遺跡はメキシコ中央部の影響を強く受けており トゥーラ帝国の遺跡と共通点が多いといわれています。このトゥーラ帝国は紀元900年前後にメキシコ中央部のイダルゴ (Hidalgo) 州のトゥーラに都を置いたトルテカ (Tolteca) 族が支配していた強大な帝国でありましたが 紀元1160年頃クーデターが発生して 首都のトゥーラは破壊されてしまったということです。丁度日本の飛鳥 (あすか)が何処にあったか長い間判らなかった様に トゥーラも完全に破壊しつくされて その場所すら不明でしたが 最近その遺跡がイダルゴ州で発見されて一部の復元が行われ トゥーラ帝国の首都がよみがえりつつあります。

さて このクーデターで都落ちしたククルカン王はユカタン半島に到着し マヤ族と戦闘を交えた末に彼等を



写真1 パレンケの中央宮殿とやぐら

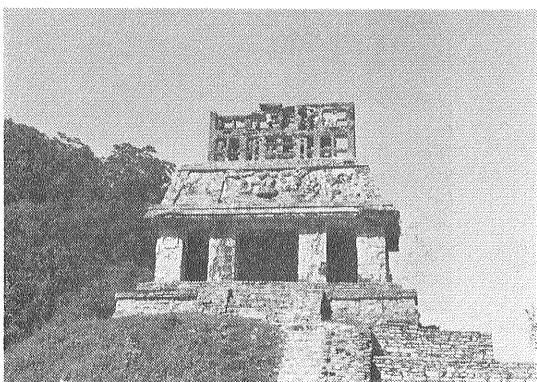


写真2 パレンケの太陽の神殿



写真3 パレンケの碑銘の神殿

征服してチチェン・イツァーに首都を置きました。このため チチェンの遺跡はトルテカ様式とマヤのプーク様式の融合した建築が立ちならんでいるといわれています。

この8平方キロメートルにまたがる壮大なチチェン・イツァーの遺跡の中心には カスティージョ (Castillo)* と呼ばれる大神殿ピラミッドがそびえ立っています。このピラミッドは底辺の長さが55メートルあり 9層のテラスがあってその高さは25メートル 各4辺からそれぞれ91段の階段が頂上まであり 基底を1段として全体の階段数を加えると 計365段になる様に造られています。このピラミッドの内部には初期の古いピラミッドのあることがトンネルを掘って明らかにされましたが メキシコ中央部のピラミッドでは1つのピラミッドの上に



写真5 パレンケの遺跡から発見されたヒスイのマスク

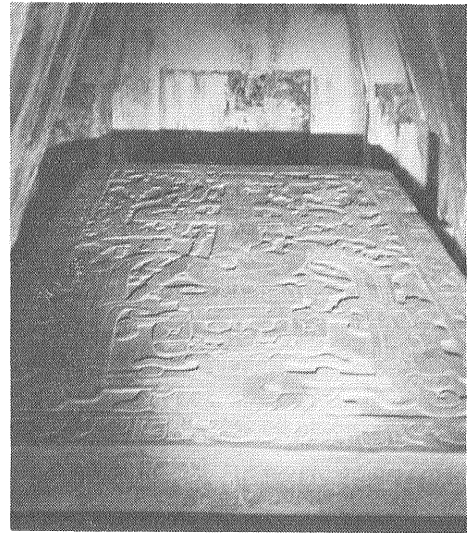


写真4 パレンケの石棺のふた

新しいものを重ねて作る例が多く これはトルテカ様式の1つといえるでしょう。この古いピラミッドは特に保存状態が良好であり 神殿には歯をむき出したジャガーを型どった石の玉座が発見されましたが ジャガーの眼は美しい貝殻で 背中上の斑点はヒスイをはめこんで作られていました。また玉座の前には“チャクモール”と呼ばれる横たわった人間像があり その腹の上に いけにえとして捧げられた捕虜のえぐり出された心臓を受ける皿状の容器を両腕で支えている姿勢をしています。これと同じ像がトゥーラの遺跡でも発見されております。

“カスティージョ”の急な階段を登って 擬似アーチをとりいれた神殿にたどりつくと 眼下には“戦士の神殿”が展開して整然とした立像が並んでいるのが見渡せます。この神殿は丁度トゥーラの遺跡の“B”ピラミッドによく似ていますが これをさらに大規模にしたより高度のすばらしい彫刻技術を駆使しており トルテカの戦士を浮き彫りにした角柱の並ぶ正面にはチャクモールの像を置き 戦士達が支えているテーブル型の祭壇のある聖域もつらえてあります。

さらに面白い建築物としては チチェンの遺跡の中に美事な球技のあることで 両側に高さ8メートルに及ぶ壁を築いて その壁の高いところに石の輪をとりつけており その輪の中の一つに先に球を押し込んだチームが勝ちというゲームであったといわれています。これはマヤ式のものではなくて トルテカ式の競技であります。場合によっては敗者のチームは首を切られるという残酷な罰を下されたことが壁の一部に彫刻として残さ

* お城のことで日本では城塞と訳されています

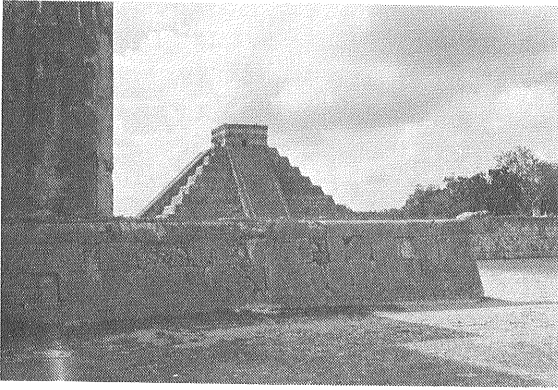


写真8 チチェン・イツァのカスティージョ神殿

れているそうです。またカラコル (Caracol)*と呼ばれる円形ドームの建物がありますが 遠くから眺めると最近の天文台の形と良く似ており 丸型の建物の内部にはラセン状の階段があり ドームの上は丸い穴があげられていて 太陽や月の観測を行っていたという意見が有力の様です。

これらの建物の並ぶ中央に広場があり そこから延び



写真8 トゥーラ遺跡の戦士像

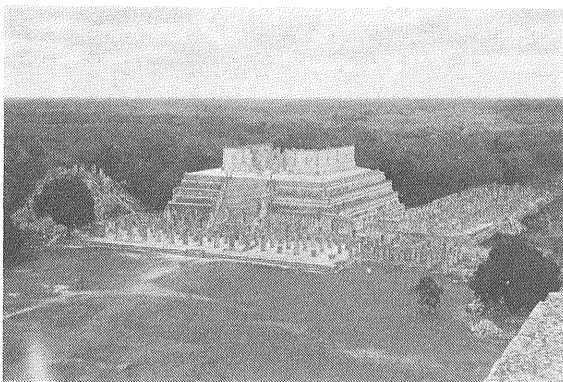


写真9 チチェン・イツァの戦士の神殿

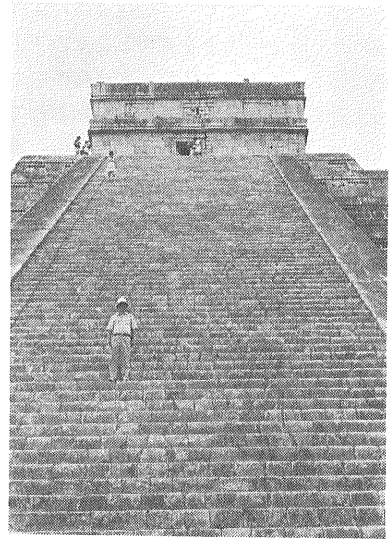


写真7 カスティージョ神殿の正面階段

る通路のはずれ付近に“セノテ” (Cenote) と呼ばれる泉があります。この泉は石灰岩地域のドリーネとして生じたもので 直径66メートル 高さ20メートルの切り立った崖に囲まれており この中に多数のいけにえが雨乞いや神の予言を知るため投げこまれたため 別名“いけにえの泉”とも呼ばれています。また 美しいヒスイの宝石や黄金の円板等もこの泉からひき上げられました。

以上マヤ文明の代表的な遺跡であるパレンケとチチェン・イツァを紹介しましたが マヤの優れた文明の一端に興味をお持ち下さればこれに越したことはありません。

マヤのヒスイ

さて 私がとくにマヤのヒスイに興味をもったのは

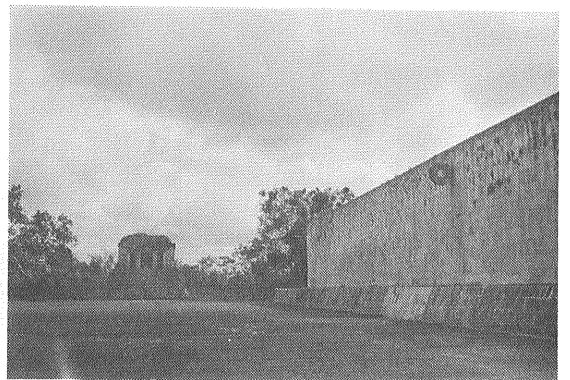


写真10 チチェン・イツァの球場

* かつむりのこと

その産地を追跡することによって低温高圧の変成帯の分布が明らかになるということを期待したためです。つまり一般にヒスイは低温高圧型の変成帯の中にある塩基性～超塩基性岩類に伴ってることが知られておりメキシコではバハ・カリフォルニア半島の西端にこの変成相に属するフランシスカン層群が分布していますがさらに海を渡って南下したときのフランシスカン層群の行方をヒスイの産地から探し出すことが出来るのではないだろうかという期待を持った次第です。しかしこの期待は見事にはずれてしまいました。というのは先ず第1にマヤのヒスイの原石は河床を流れて来る礫が多いこと第2にはヒスイが加工された後広い範囲にわたり流通しているということが判明したためです。その代りにマヤのヒスイにまつわるいろいろの面白いことが調べて行くうちに明らかになって来ましたのでこれらについてお話ししましょう。

先ほどヒスイの産地は不明と述べましたがマヤ地域でのおおよその見当としてはメキシコ南部からグアテマラを横断してホンデユラス湾にぬける超塩基性岩を伴った変成帯中に産したものであろうと推定されます。

グアテマラのマンサナル (Manzanal) やカミナルフユ (Kaminaljuyu) の遺跡から多数のヒスイが発見されとくに後者では90キログラムの巨石から宝石をとり出したといわれていますが地質的にみてカミナルフユから直接ヒスイが産する可能性は薄いようで恐らく別のところから運ばれてきたのでしょう。

マヤの遺跡にあるヒスイは多種多様でありコパン (Copan) やペテン (Petén) のものは白い斑点のある美しいエメラルド・グリーンですがカミナルフユでは明るい黄みどりまたキチェウ (Quiché) では黄味を帯びた灰色かまたは鈍い濃緑色を示し磨いても美しい光沢が得られない代物のようです。この他マヤより古いオルメカのラ・ベンタの遺跡では本当に美しい青色のヒス

イがありマヤ時代にこれを再び加工し直したのものもあるといわれています。マヤの領域では最南端のコスタリカで発見されたヒスイは明るい青色マヤで加工したものがメキシコ中央部のテオティワカンにもたらされたとみられるヒスイは灰色を示しています。

御承知の方も多いとは思いますがヒスイにはジェード輝石から成る硬玉と陽起石や透角閃石を主としたネフライト (nephrite) と呼ばれる軟玉がありますがマヤのヒスイはどちらかといえば軟玉の方が多いのではないかと思います。またヒスイの原石の大半は河床の転石の様で加工されないままの原石には水流により円磨された跡が残されているといわれています。

ヒスイに対するマヤ族の考え方は宗教的な信仰に通ずるものがあり“羽毛のへび”と呼ばれるケツツァル・コアトル (Quetzal Coatl) の神様——日本でいえば天照大神に相当——のみしるしとして緑色の鳥 (主としておうむ) の羽根と緑色のヒスイが珍重されたようです。とくにヒスイは死者に生命を与えて魂の復活を図る能力があると信じられたため天国への通行証として死者の口にヒスイを含ませることがしばしば行われまた死者にヒスイで作ったマスクをかぶせる風習があったことはパレンケの遺跡で述べた通りです。この他チチエンでは神への捧げものとしていけにえ以外に貴重なヒスイをいけにえの泉に投げこんでいました。

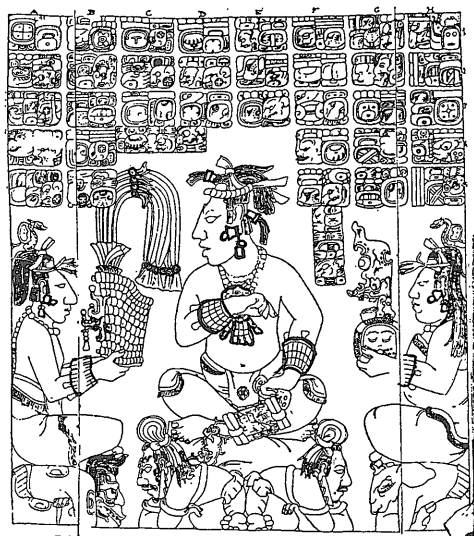
しかしヒスイは為政者や祭祀僧の装飾品として最も多く用いられていた様でパレンケの有名な壁像から当時の状態が想像されます。ヒスイはラップの様な形のイヤリング、人の顔を刻みこんだペンダント、腕には棒状のヒスイを束ねたブレスレットまたおうむの青い羽根で作られた冠のつなぎ目にヒスイのビーズがはめこまれています。他の地域の石像では足首や腰回りにもヒスイの飾りがとりつけられていた様です (第5図)。最も豪華版としては、同じくパレンケの遺跡の中に男性



写真11 チチエン・イツァのカラコルの遠望



写真12 カラコルの円形ドーム



第5図 パレンケの壁像図（耳・腕・胸および冠等の実線で濃く示した部分はヒスイが用いられている）とマヤの神聖文字（学生出版社編マヤより）

の僧侶がヒスイのビーズをメッシュ状に飾り立てたシャツを着用していた壁像も残されています。

ヒスイに刻まれた年代

この様にマヤの貴族や僧侶が正装したときの彼等の礼服に大量のヒスイを飾り立てたため ヒスイの需要に対して供給が追いつかなくなり ますますヒスイは貴重となってきました。 その結果 ヒスイは家宝として子孫に受けつがれ また貢物として遠くに運ばれるということになった様です。 後者の例としては メキシコ中央部のテオティワカンの遺跡から明らかにマヤ特有の彫刻のあるヒスイが発見されていることがあげられます。

従って ヒスイが異民族にまで流通していることからヒスイの発見地は産出地と結びつかず ある墓からのヒスイも産地や埋葬時の年代を知る手懸りにはならないため 副葬品や死体の置かれた層準からその墓の年代を類推するしかありません。

しかし グアテマラのカリブ海に面したプエルト・バリオス(Puerto Barrios)の近くで 1864年に運河の堀削工事をしていた1人の人夫が紀元1,000年頃に作られた銅製の鐘とヒスイの板を発見しました。 その後 このヒスイの板は行方が解らなくなりましたが オランダのライデン(Lyden)で見つかったため ライデン・プレートと呼ばれることになりました。 このプレートは縦長の円形をした平べったいヒスイの板で 両面を磨いて彫刻をほどこしたものです。 その片面にはマヤの貴族が

1983.11.

捕虜を踏みつけている像が彫られています。貴人の頭と足は左を向いているにもかかわらず胴は正面を向いており 彫刻した工芸人の稚拙な構図がかえって微笑ましく感じられます。

問題はその裏面にマヤの「長期的計算法」による日付が記録されていたことで 最上部にマヤ独特の導入文字があつて その下に順次日数を示す単位の大きなものから小さなものが並べられています。また それぞれの単位の左側には横棒と点を組み合わせた数が刻まれ 全体の合計は1 253 912日となり 紀元320年に相当すると推定されています。

8バクトウン	(1バクトウン=20カトウン)
14カトウン	(1カトウン=20トゥン)
3トゥン	(1トゥン=18ウィナル)
1ウィナル	(1ウィナル=20キン)
12キン	(1キン=1日)

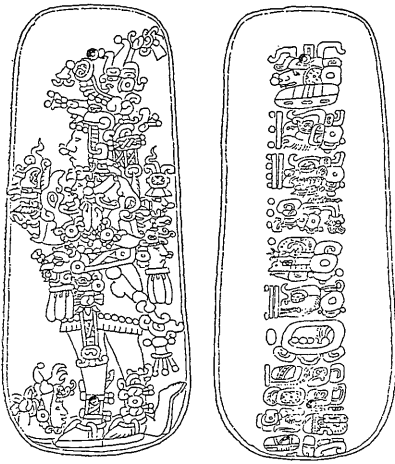
この日付は以前最も古いマヤの記録とされていましたが ティカル(Tikal)の遺跡で紀元292年の日付が記録された石碑が見つかって訂正されました。 さらに古いものとしては チアパス中央部のグリハルバの谷に建てられた チアパ・デ・コルソ(Chiapa de Corzo)の2号石碑があり これに記録された日付は紀元前36年に相当しています。 この事実からもマヤの暦は紀元前1世紀にはオルメカ文明の影響の下にほぼ完成されていたといえるでしょう。

ライデン・プレートに記録された紀元320年はマヤ文明が本格的に開花する古典期(紀元300年~900年)の初期に相当し この時期の正確な日付が残された碑文や彫刻が存在する例は世界的に見てもきわめて稀であり 本当に貴重な記録が残されていると思われま

す。最近では困ったことにメキシコでこのような出土品に良く似たまがいものが作られており このため本物とにせ物の区別が難しいばかりでなく 彫刻された日付も困乱を



写真13 ヒスイのビーズ人物像 カミナルフェー出土(学生出版社マヤより)



第6図 ライ
デン・ブレ
ート（学生
出版社編
マヤより）

来すことになり ひんしゅくを買っているといわれています。

ヒスイの加工

マヤ文明では紀元 900 年前後の古典期末期になっても日常生活では石器が最も重要な役割を果たしており 装飾品にのみ金や銅を少量用いるようになってきていたようです。このため 当時貧弱な工具を用いて芸術的価値の高い作品を生み出した石に対する加工技術はきわめて優秀であったといってもいい過ぎではないでしょう。

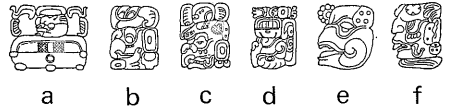
マヤの石の文化は建築部門で壮大なピラミッドを構築し また装飾品の作製や壁面の彫刻の面でも光彩を放っていますが 今回はヒスイに焦点をしばって話を進めましょう。

ヒスイを加工する場合 その用途に応じて整形する必要がありますが 先ず切断するのに当時どういう方法をとったのでしょうか？ 切断の第 1 の方法は糸に砂をまぶしてヒスイ片をひき切ることを行ったようです。恐らくこれに用いた糸はマゲイ (maguey) と呼ばれる竜舌蘭からとった繊維であろうと想像されますが これは麻糸よりも丈夫な代物です。また 砂は黒曜石の粉末を用いたようですが ヒスイ板が薄いときは切目を入れてハンマーでたたき折ったり また厚いときは半分切れた後は裏返して切る方法も当然とられたことでしょう。

第 2 の方法は糸の代りに薄い木の板かまたは粘板岩の薄くはがれた岩片を用いて黒曜石の粉をかけながら切り切り口が深くなると錐状の棒で石粉を突込む方法が行われたということです。

現在石を切るのはダイヤモンド・カッターが用いられて 軟らかい岩石や鉱石はまるで豆腐を切る様に切断出来ますが マヤではマゲイの根を堀り起して作ったテキ

•	1	≡	11
••	2	≡	12
•••	3	≡	13
••••	4	≡	14
—	5	≡	15
•—	6	≡	16
•—•	7	≡	17
••—	8	≡	18
•••—	9	≡	19
••••—	10	≡	0



第7図 マヤの20進法を示す数字（上段）とマヤの暦数（a：導入文字 b：バクトゥン c：カトゥン d：トゥン e：ウィナル f：キン）（学生出版社編 マヤより）

ーラでも飲みながらマゲイの糸を何度も取換えて 小さなヒスイ片を何日もかかって切ったのではないだろうかなどと想像されます。

次に穴をあける作業はどのようにして行ったかという と やはり黒曜石の粉末を用いて先の尖った木の棒を錐の様にもみ込んで穴をあけた様です。特にヒスイのビーズが礼服の装飾に多く用いられていますが ビーズの穴あけは両端からそれぞれ穴をあけて、ビーズの中央部で貫通する方法がとられたため 一般にビーズの真中付近で穴の大きさが一番せまくなっているものが多いようです。古典期の終り頃には穴あけ用の棒としてより効果的な鳥の骨などが用いられましたが その頃には錐の後頭部とこれに直交する横棒の両端を糸で結び 横棒の上下運動で錐に回転運動を与える道具が発明されたため ビーズの細長い穴は以前よりも効率的にあけることが出来た模様です。さらに この回転運動をよりスムーズにするため ハズミ車も応用された形跡が残されているようで 当時の粗末な用具も種々工夫をこらして用いた跡がうかがえます。

ヒスイの整形が終わった後の仕上げ加工として研磨が残されていますが この工程では研磨粉に赤鉄鉱とヒスイの微粉が利用されたといわれています。メキシコのマヤ領域では 南部マヤ地域に接触交代型の鉄鉱床がありますが この鉱床の酸化帯に赤鉄鉱が生じており これを活用した可能性が考えられます。しかし この地域はメキシコ中央部の支配下に置かれていたことが多いことから 研磨材の入手とひき換えにマヤのヒスイが渡さ

れ これがテオティワカンで発見されたのではないだろうかという想像もあながち荒唐無稽とはいえないでしょう。

マヤの貴族や僧侶が装身具としてつけたイヤリングは非常に目立っており その形は丁度ラップ状をしていて 外側の直径が約 10cm 内側では径 2.5~3 cm という大きなヒスイを肥大した耳たぶにつけていたようです。この他 額や胸 よろいのベルトなどにもぶら下げていましたが 面白いことに 1 塊のヒスイを加工するとき ラップ状のイヤリングを作るのと同時に削り出されたいくつかの薄片を用いて ビーズをはじめ人の顔 猿 蛇等の動物の頭を刻みこんで ペンダントやお守りにするなど無駄の無い細工をしていた形跡が残されています (第 8 図)。

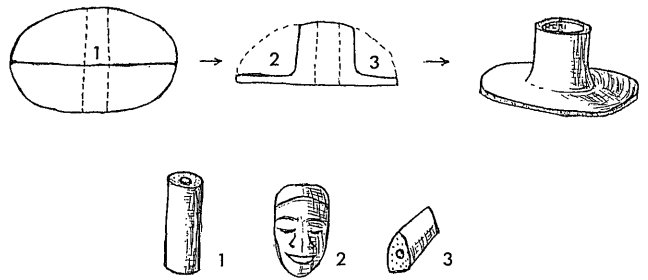
先にも述べましたが この様なヒスイの加工はある特定の場所に専門の職人が居たらしく コパンで発見されたヒスイの面もパレンケで作られたものであろうと推定されています。

あ と が き

ヒスイを通じてマヤ文明の一端を紹介しましたが 紀元前から 10 世紀にかけて高度の文明に到達していたことは驚嘆すべき人類の遺産といえるでしょう。しかし マヤ文明については未だ不明の部分が多く 神聖文字にしてもほとんど解読されないままになっているということです。

15 世紀初めにスペイン人によってアステカ王国が征服され 少しおくれてマヤ領域も占領されましたが マヤ族は見かけの従順さとうらはらに強力に抵抗をくり返し 何度も圧制に対して反乱を起しています。マヤでは単一国家が形成されなかったため かえってアステカ王国のように中央権力を打ち倒すことで全体を征服することが出来ず マヤ領域の統治は困難であったようで 1860 年のマヤの反乱ではユカタン半島全体がマヤ族の手におちるといったこともあり 1910 年にも反乱が起きています。マヤの地域が本当に平静になったのはつい数 10 年前のことで 現在でも他の支配を拒んで密林の中に未開の生活をしているラカンドン族やタヤサル島のイツァー族が居るといわれています。

マヤの書きのこした「チラム・パラムの書」の一節に



第 8 図 ヒスイの原石から イヤリング ビーズ ペンダント等を作成する加工工程

は次のような詩*がささげられています。

食べよ 食べるがいい、 汝にはパンもある。
 飲め 飲むがいい、 汝には水もある
 あの日 汝はこの土地を手に入れた
 あの日 大地は輝かしい光に満ちていた
 あの日 雲がわき起った
 あの日 山がおこった
 あの日 一人の強者がこの地を襲った
 あの日 すべてが廃きよとなった
 あの日 しなやかな木の葉が散った
 あの日 死者のまなこが閉ざされた
 あの日 木には三つの死体がかけられていた
 あの日 老人も幼児もその木に吊された
 あの日 戦いの旗が高く揚げられた

そして、現在マヤ文明と精神は失われ マヤ族は密林の中に散り散りになったといわれています。

しかし 本当にマヤ族は彼等の固有の精神まで失ってしまったのでしょうか？ 私には近い将来彼等の中に眠っているものが目覚めて 再び新しいマヤの世界を築く日が来るように思えてなりません。

主 な 参 考 文 献

- マイケル・D・ユウ(1966):マヤ(寺田・加藤訳)学生社
- Adrian Digby (1972):Maya Jades, The British Museum.
- Jose A. Frauch (1958):Manual de Arqueologia Americana, Aguilar
- 石田英一郎(1967):マヤ文明 中公新書
- メキシコ大学院大学編(1973):メキシコの歴史(村江訳) 新潮選書
- 桜井邦明(1982):天文考古学入門 講談社現代新書

* 学生出版社編マヤより